

ノアの爽風 かぜ



～目次～

● 病院短信『認知症の専門病院として（その2）』

瓦井 洋

● 看護日誌

● 介護だより

● 日常の一コマ

2月の予定



◆誕生日会&節分

1病棟: 6日 (金) 14:00～	} 各病棟にて
2病棟: 5日 (木) 14:00～	
3病棟: 4日 (水) 14:00～	



病院短信

セントノア病院 創業者
瓦井 洋

『認知症の専門病院として（その2）』

前回は私が今から35年ほど前に、千葉の病院で初めて認知症の患者さんに会った日の話をしました。結局その患者さんを始め、4人ほど入院していた認知症の患者さんたちは、全て退院させられて、現在でもその病院は認知症患者の受け入れはしていないという話でした。

確かに高齢者専用の病棟とはいえ、認知症患者さんと一般の患者さんとの「異越同舟」には、やはり無理があるのも事実です。だからと言って、認知症の患者さんたちを全て拒否してしまうというのはどうなのでしょうね。ここでも病院側の傲慢さが鼻に付きます。さて、千葉の病院に対してのモヤモヤはともかく、次に頼まれて赴任した神奈川の病院では、行ってみたら倒産寸前で、私を呼んだのは再建のためではなく、どうも倒産の後始末をする人間が欲しかったようなのです。だからと言ってこのまま倒産という事になれば、入院している150人を超える患者さん達はそれぞれ「野ざらし」になってしまいます。それを避けるには、早急に患者さん達を他の病院へ転院させなければなりません。実はこれがまた大変なのです。多分、行政だけで150人からの入院患者さんを他の病院へ転院させるなんて、数か月掛かってとても出来るとは思えません。また、もしそんな事になればご家族たちも黙ってはいないでしょうし、世間も大変な騒ぎになるでしょうね。実際にあるテレビ局が私のもとへ取材をさせてほしい、と言って来たほどですから…。もちろん取材は拒否しましたけどね。とにかく入院患者さんを「野ざらし」にしてしまうなんて、この医療業界に携わる者として絶対に許される

ことではありません。何か策はないのだろうか。私はあらゆる可能性を考えながら、ある一つの結論を胸に秘めて行政庁に向かいました。そしてその行政庁の担当者に合わせて頂き、胸に秘めた一つのやり方を伝えました。そしてこのやり方以外に入院患者さんを救う方法はないし、もしこのやり方に許可を頂けないのなら、私はこの病院から手を引きます。とごく穏やかに？談判をしました。もしかしたらこの私の談判は、半分脅しに聞こえたかもしれませんね。その脅しに聞こえたかもしれないやり方とは、この病院の「廃院届け」を出すと同じ日に、新しい経営者のもとで、新規の「開院届け」を同時に出して開院の許可を出して頂くという、おそらく前代未聞のかんりの荒技を使うことでした。このやり方は是非はともかく、その時の私には、何があっても患者さんを「野ざらし」にしてはならない、という強い信念がありました。たからね。

介護だより

新しい年を迎え、皆様いかがお過ごしでしょうか。2月は寒さが一段と厳しくなり、体調を崩しやすい季節です。室温や湿度の調整、こまめな水分補給を心がけ、感染症予防に努めております。また、お正月行事や季節を感じていただけるレクリエーションを通して、笑顔あふれる時間を大切にしています。患者さんの小さな変化にも気付けるよう、職員間での情報共有も欠かしません。

患者さん、お一人お一人の気持ちに寄り添い、安心して過ごしていただける支援を行ってまいります。

日常のーコマ

今月は3病棟の純さん（77歳）です。純さんは宮城県出身で、3人姉弟の末っ子として生まれました。大学院で博士号を取得後、渡米し現地の研究所で研究者として働き、時々日本に帰ってくる生活でした。36歳の時にご結婚され、その後は一家でアメリカで生活していました。趣味はテニスとジョギングで、奥様の話によると研究室の机にはラケットが立てかけてあり、誘われるとすぐにラケットを手に取り、近くのテニスコートに行っていたそうです。また、ジョギングをしながら、研究の考えをまとめているそうです。52歳の時に一時帰国し、その後はアメリカで単身生活となりました。67歳の時にアメリカから帰国し、その頃には物忘れや水の出しっぱなしといった認知症の症状が出ていたそうです。週1回ヘルパーの利用をしながら長野の山荘で暮らしていましたが、74歳の時痔核出血で入院され、そこで急激に認知症が進行してしまいました。新型コロナもあり、長野から都内の病院に転院され令和5年10月に当院に入院されました。

入院当初は介助の時に声を掛けて説明しますが、作業療法の活動中に立ち上がってしまったり、介護に抵抗があったり日常生活において落ち着かない様子があり、意思疎通や会話は困難な時がありました。



米国の国立研究所で勤められていたので、独語で話されているお話もなにか難しい論文を述べているような様子で、スタッフの声掛けに「NO、NO」と聞き取れないですが英語で返答されることがあります。特にご機嫌が悪い時には英語で話されているのが印象にあり、今でも研究のように“なぜ？”を追求しているようにも感じます。純さんの英語の習慣にスタッフが挑戦しましたが英語の壁は少々高かったです。（笑）病状の変化や年齢にともなう身体的変化もありましたが、入院時より食欲も変わらず自力摂取されています。また、今は当院の生活に慣れ穏やかに過ごされています。これからも純さんらしく過ごせるようお手伝いできればと思います。

看護日誌

2月は1年の中でも寒さが厳しく、患者さんの体調や生活リズムに影響が出やすい時期です。寒冷による血圧変動や活動量低下、食欲不振などがみられ、日々の観察と声掛けが大切だと思います。特に転倒予防や感染対策を意識し、環境整備や保温への配慮が必要です。また、患者さんとの関わりの中で不安や孤独感を訴えることもあるので、傾聴し季節的な要因を踏まえ、安心して療養できる環境を提供できるよう努めていきたいです。